

マリヴォーにおける前置詞 + 関係代名詞について

著者	太治 和子
雑誌名	仏語仏文学
巻	22
ページ	25-39
発行年	1994-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017404

マリヴォーにおける 前置詞＋関係代名詞について

太 治 和 子

I 前置詞を伴う関係代名詞について

関係代名詞には、前置詞を伴う場合と伴わない場合とがある。前者は後者に比べて種類も多く用法も複雑で、17世紀から18世紀にかけて、数多くの文法家たちがその用法を明確にし規則化しようと努力してきた。中でも、*quoi* について今日のような考え方が打ち立てられたのは18世紀においてであるが、その用法は今なお揺れ動いているのが実状である。

ここでは、前置詞を伴う関係代名詞を取り上げ、18世紀の文法家の見解をまとめたうえで、マリヴォーの作品の中に現われた実例を調べてみた。調査対象は、*Le Paysan parvenu*¹⁾ の第1章から第5章(1734-1735)までと、*La Vie de Marianne*²⁾ の第1章から第8章まで(1731-1737)である。また、必要に応じて1781年に出版された全集版との比較も試みる。

i 前置詞＋*quoi*

Brunot は、《Un fait essentiel de l'histoire de la syntaxe française au XVIII^e siècle, c'est la découverte ou la création de nouveaux pronoms indéterminés: soi, quoi》³⁾ と述べている。17世紀には、具体的な物を先行詞とする *quoi* の用法は普通であり、16世紀までは人を受ける *quoi* の

1) P. Marivaux, *Le Paysan parvenu*, Garnier, 1992.

2) P. Marivaux, *La Vie de Marianne*, Garnier, 1982.

3) F. Brunot, *Histoire de la langue française des origines à nos jours*, A. Colin, 1966, t. VI, p. 1673.

例もしばしば見られた⁴⁾。17世紀の文法家 Vaugelas は、人を先行詞とする *quoi* の用法については、《on ne dira point, *ce sont les hommes du monde à quoy nous devons le plus de respect; mais à qui; Il n'y a que les Estrangers, qui puissent avoir besoin de cet advis*》⁵⁾ と述べて斥けているが、事物名詞を受ける用法については、*lequel* の形を *rude* であるとして嫌った結果、*quoi* を用いる方が *élégant* であると考えていた⁶⁾。18世紀になると *quoi* の用法を限定しようという動きが現われる。Régnier-Desmarais は、前置詞が *à* の場合には *auquel* の代わりに *à quoi* を用いることもできるが、*de* の場合には先行詞が *ce, rien* の時にのみ *de quoi* を用い、それ以外は *duquel*, あるいは *dont* を用いるべきであると説く⁷⁾。De Wailly⁸⁾ や Féraud⁹⁾ も *ce* や *rien* の後では必ず *quoi* を用いるべきだとする。また、Féraud は Régnier-Desmarais とは異って、前置詞が *à* の場合でも、《des lois *à quoi* il soit obligé d'obéir, 《la complaisance *à quoi* il avoit obligé les Evêques》の *à quoi* はそれぞれ *auxquelles, à laquelle* を用いるべきであると指摘している。Marmontel は、《*quoi* répond *à ce, à cela* ... Il vient après quelque chose de vague, d'indéfini dans la pensée, ou à la suite d'un discours dont il résume la substance》¹⁰⁾ と述べている。これは、今日の *quoi* の用法と同じである。

4) Ch. Nyrop, *Grammaire historique de la langue française*, Genève, Slatkine repr., 1979, t. V, pp. 334-338.

5) Cl. F. de Vaugelas, *Remarques sur la langue françoise*, Genève, Slatkine repr., 1970, p. 54.

6) *ibid.*

7) F. Régnier-Desmarais, *Traité de la grammaire françoise*, Genève, Slatkine repr., 1973, pp. 304-305.

8) F. Brunot, *op. cit.*, p. 1678.

9) Abbé Féraud, *Dictionnaire critique, de la langue française*, J. Mossy, 1787, t. III, pp. 334-335.

10) F. Brunot, *op. cit.*, p. 1678.

マリヴォーの作品を調査した結果は、次の表のようになる。

<表1>

	先行詞による分類	前置詞による分類
前置詞+quoi (22/51)	前文・前節 16/38	à 8/20
	ce, chose, rien 5/12	de 1/11
	具体的事物名詞 1/1	après 7/11
		avec 3/1
		comme 2/0
		sur 1/2
		sans 0/3
		moyennant 0/1
		pendant 0/1
		en 0/1

それぞれ、斜線の左側の数値が *Le Paysan parvenu* からの用例数、右の数値が *La Vie de Marianne* からのものである。*Le Paysan parvenu* では22例のうち1例が、*La Vie de Marianne* でも51例のうち1例が、具体的な事物名詞を受ける quoi であり、なお前置詞は2例とも avec であった。

- prends sur ma table ce petit rouleau d'argent avec quoi tu attendras dans une auberge que Geneviève soit sortie d'ici

(*Le Paysan parvenu*, p. 26)

- je m'en vais chercher mon aune, avec quoi vous vous soutiendrez

(*La Vie de M.*, p. 107)

文法家の意見に従えば、quoi ではなく lequel, laquelle が用いられなければならないはずである。しかしながら、両作品とも、例外はわずか1例であったわけであるから、quoi の用法は今日と同じように、ce や rien などの語を受ける場合と、前文、前節の内容を漠然と受ける場合とに限られていたと言いうことができるだろう。なお、18世紀後半に出版されたマリヴォー全集の中でも、上の二つの quoi は訂正されていない¹¹⁾。

11) *Œuvres complètes de M. de Marivaux*, Genève, Slatkine repr., 1972, t. VIII, p.38, t. VI, p. 404.

ところで、この *quoi* については今日、古い語法が復活されており、*Le Bon Usage*¹²⁾ や Nyrop の *Grammaire historique*¹³⁾ の中には、具体的な事物名詞を受ける実例が現代の文学作品の中から引用されている。Grevisse は、*Problèmes de Langage*¹⁴⁾ の中で次のように述べている。現代の作家たちが *quoi* を好んで用いる理由は、17世紀の Vaugelas と同じであって、*quoi* が *lequel*, *laquelle* に比べ、より短く軽快な音の響きを持っているからである。また、*quoi* を使用することによって、アルカイックな文体上の効果も狙っているのである。一方、Le Bidois は *quoi* を安易に使用することに対して警鐘を鳴らし、韻文以外では、*quoi* の使用は何らかの意味で漠然とした概念が存在する場合に限定すべきであると主張している¹⁵⁾。Nyrop は、*quoi* の用法が拡大し、次第に *lequel* の領域を侵しつつある今日の状況を、*ça* や *on* の問題とも関連づけて分析し、現代フランス語は変化しない語 *invariabilité* に移行しつつあるのではないかと指摘している¹⁶⁾。

ii 前置詞+*qui*

マリヴォーの作品を調べた結果は、次の表2のようになる。

用例数については表1と同じで、左が *Le Paysan parvenu*、右が *La Vie de Marianne* のものである。

前置詞+*qui* が人物以外のものを先行詞とする用法は、17世紀に既に Vaugelas¹⁷⁾ をはじめとする文法家たちによって斥けられていたが、マリヴォーの作品の中にはまだこの実例が若干残っている。ただし、次のよう

12) M. Grevisse, *Le Bon Usage*, Duculot, 1988, pp. 1088-1090.

13) Ch. Nyrop, *op. cit.*, pp. 337-338.

14) M. Grevisse, *Problèmes de Langage*, Duculot, 1961, pp. 113-117.

15) G. et R. Le Bidois, *Syntaxe du français moderne*, A. Picard, 1967, t. I, pp. 299-300.

16) Ch. Nyrop, *op. cit.*, p. 338.

17) Cl. F. de Vaugelas, *op. cit.*, p. 55.

〈表2〉

	先行詞による分類	前置詞による分類
前置詞+qui (93/157)	人 89/152	à 58/92
	物 4/5	de 2/8
	├ à 2/5	└ dontは不可能 2/1
	└ avec 1/0	└ dontは可能 0/7
	└ sur 1/0	avec 9/17
		pour 9/6
		sur 6/5
		chez 5/19
		devant 1/6
		contre 1/2
	par 1/1	
	sans 1/0	
	entre 0/1	

な文においては、注意が必要である。

◦ je m'en vais avec un cœur à qui il manquait quelque chose
(*La Vie de M.*, p. 64)

◦ les trois cœurs [...], auxquels le mien tenait le plus
(*La Vie de M.*, p. 414)

cœur という名詞を比喩的・抽象的に捉えて人物名詞とみなすか、あるいは具体的に捉えて事物名詞とみなすかは作者の意識の問題であり、その視点によって前置詞+qui の形で受けることも前置詞+lequel の形で受けることも可能だからである。そこで、cœur, tête, âme, figure といった語については、あらかじめ除外してある。

Le Paysan parvenu の中には、事物名詞を受ける次のような qui の用例があった。

◦ je me mis dans une de ces petites auberges à qui le mépris de la pauvreté a fait donner le nom de gargote (p. 40)

◦ j'ai chez moi un habit tout battant neuf à qui je mis hier le dernier point (p. 166)

◦ avec sa gorge sur qui par hasard j'avais alors les yeux fixés
(p. 186)

◦ par le loup, avec qui il se roula longtemps sur la terre (p. 214)

La Vie de Marianne の中では、次の5例で qui が事物名詞を受けていた。

◦ c'est à votre fortune à qui il faut que vous la [=votre attention] donniez (p. 31)

◦ c'était ma coiffe à qui j'avais recours (p. 62)

◦ c'est [...], celui [=le goût] à qui leur coquetterie fait le plus d'avances (p. 63)

◦ c'est bien à l'amour à qui il appartient de vous offrir un cœur (p. 422)

◦ je vais [...], retoucher à ma coiffure qui va fort bien, et à qui [...], je refais toujours quelque chose (p. 209)

最後の例を除き、すべて c'est ~ à qui ~, c'était ~ à qui ~ の構文で使われている。これは後に述べるプレオナスムの問題とも関係がある。しかも、最後の用例は、1781年の全集版の中で à qui が à laquelle に訂正されていた¹⁸⁾。*La Vie de Marianne* の中では、事物名詞を受ける前置詞 + qui は強調構文と密接な関係にあると推論される。

iii où と前置詞 + lequel, laquelle, lesquels, lesquelles

最初に、auquel, à laquelle 等に代わる où について述べる。Vaugelas は lequel の形を嫌ったために auquel よりも où を用いる方が好ましいと考へ¹⁹⁾、また武本氏の調査によれば、17世紀の文学作品の中にはこの où の用例数が非常に多い²⁰⁾。ところが、マリヴォーの2つの作品の中では、間

18) *Œuvres complete de M. de Marivaux*, t. VI, p. 567.

19) Cl. F. de Vaugelas, *op. cit.*, p. 91.

20) 武本雅嗣「17世紀のフランス語にみられる関係詞の用法——à が前にある関係代名詞と関係副詞 où——」『千里山文学論集』第41号, 1990年, 119-133頁。

接目的補語を受ける où, すなわち auquel に代わる où の用例は次の 1 例しかない。

- *comportez-vous d'une manière qui récompense monsieur des soins où sa piété l'engage pour vous* (La Vie de M., p. 28)

なお、次の用例は、Brunot の語史の中で奪格 ablatif の例として挙げられており²¹⁾、また、Deloffre の説明にあるように²²⁾、この où には漠然と場所を示す概念が残っていると考えられる。したがって、この場合、auquel に代わる où であるとは認められない。

- *des circonstances où je n'ai point de part* (Le Paysan parvenu, p. 233)

したがって、マリヴォーの作品の中には既に auquel の代わりに où を使用することはほとんどなかったものと思われる。

前置詞+lequel についてマリヴォーの作品を調査した結果は、次の表 3 のとおりである。

事物名詞を受ける用例が圧倒的に多いが、人を受ける用例もある。例えば、

- *Tel sont ceux que j'appelle des dévots, de la dévotion desquels le malin esprit a tout le profit* (Le Paysan parvenu, p. 48)

このような文では、関係代名詞が前置詞句の一部になり、dont を用いることができず、人でも物でも duquel を用いる。更に、人の場合には de qui を用いることも可能である。

- *Revenons à Catherine, à l'occasion de qui j'ai dit tout cela* (Le Paysan parvenu, p. 48)

ただし、18世紀の文法家 Lévizac は、この構文においては、人を受ける場合も duquelの方が望ましいと考えて、次のような例を挙げている。

21) F. Brunot, *op. cit.*, p. 1649.

22) F. Deloffre, *Une préciosité nouvelle, Marivaux et le Marivaudage*, A. Colin, 1967, pp. 381-382.

〈表3〉

	先行詞による分類	前置詞による分類
前置詞+lequel laquelle lesquels lesquelles (51/82)	人 4/7 à 0/2 de 3/1 chez 1/1 sur 0/1 avec 0/1 parmi 0/1 物 47/75	à 9/25 de 7/7 ↳ dontは不可能 6/7 ↳ dontは可能 1/0 avec 15/18 par 5/2 dans 4/8 sur 3/10 pendant 2/7 pour 2/1 à travers 1/1 chez 1/1 après 1/0 contre 1/0 entre 0/1 parmi 0/1

le prince à la protection duquel²³⁾

Le Paysan parvenu の中で人物名詞を受ける lequel の4例のうち、3例までが以上のような構文の中で現われていた。残りの1例は次のようなものであった。

◦ la dame de chez laquelle j'étais sorti (*Le Paysan parvenu*, p. 41)

La Vie de Marianne の中では、先行詞名詞と関係代名詞が他の語によって離されている場合に、lequel が用いられていた。

◦ c'est M. de Climal, qui rougit et pâlit tour à tour en me voyant, et sur lequel je ne jetai non plus les yeux

(*La Vie de M.*, p. 136)

◦ le jeune homme aimable et distingué par sa naissance chez lequel

23) Abbé de Lévizac, *L'art de parler et d'écrire correctement la langue française*, Rémont, 4^e éd., 1809, t. I, pp. 331-332.

on m'avait portée (La Vie de M., p. 356)

Le Bidois は、一般に人に対しても *lequel* を用いることができるが、その場合にはより《sélectif》なニュアンスがあると述べている²⁴⁾。ただし、人物名詞を受ける *lequel* が先行詞のすぐ後に続く例もある。

◦ j'aimais un homme auquel il ne fallait plus penser
(La Vie de M., p. 190)

また、前置詞が *parmi* の場合が 1 例あるが、今日においても *parmi qui* の形は用いることはできず必ず *parmi lesquels (lesquelles)* の形で用いられる。

iv dont

dont の用例数は非常に多く、*Le Paysan parvenu* で 177 例（人に対し 57 例、物に対し 120 例）、*La Vie de Marianne* で 291 例（人に対し 113 例、物に対し 178 例）あった。

前置詞が *de* の場合には、*de quoi* の形を除けば、*de qui*, *duquel*, *dont* の 3 つの関係代名詞が存在するが、その中で *dont* の用例数が圧倒的に多い。したがって、人物名詞であっても事物名詞であっても *dont* を用いるのが通常であり、そうでない場合には何らかの特別な理由が存在するのではないかと思われる。

duquel の形が用いられるのは、*dont* を用いることができない構文（前置詞句の一部となる場合）においてであった（2 つの作品を合わせて 13 例ある）。例外は次の 1 例のみである。

◦ ce qui tout ensemble lui [=à Agathe] faisait une physionomie piquante et spirituelle, mais friponne, et de laquelle on se méfiait d'abord
(Le Paysan parvenu, p. 87)

de qui の中には「出所・起源の補語」²⁵⁾を表すものがある。

24) G. et R. Le Bidois, *op. cit.*, p. 296.

25) 朝倉季雄『フランス文法事典』白水社, 1983年, 316頁。

- l'homme dont je vous ai parlé, et de qui je les [=mes hardes] tenais (La Vie de M., p. 159)

Le Bidois は、この complément d'origine に dont を用いることはできないと述べている²⁶⁾。次の例も、出所・起源の補語である。

- Valville, de qui [...] j'avais reçu de si fréquentes lettres (La Vie de M., p. 362)

- la tournière, qui était la seule de qui elle pût tirer quelques lumières (La Vie de M., p. 323)²⁷⁾

ただし、dont を用いることが可能な場合に de qui が置かれていることもあった（4例）。

- ce religieux de qui je ne vous ai rien dit (La Vie de M., p. 244)

最後に、dont と d'où について簡単に触れる。17世紀に Vaugelas は lieu matériel については dont ではなく d'où を用いるべきであると主張し、18世紀になっても De Wailly や Féraud はこの規則を守ろうとした²⁸⁾。しかしながら、マリヴォーの作品の中では、次のように

- dans un cabinet dont elle ne sortait qu'avec une tristesse dévote et précieuse sur le visage (Le Paysan parvenu, p. 195)

- Dans le quartier d'où nous sortons (Le Paysan parvenu, p. 257)

現実の具体的な場所に対しても dont を用いたり d'où を用いたりしていた。

26) G. et R. Le Bidois, *op. cit.*, p. 307.

27) 出所・起源を表す補語に dont が用いられることもある。

un homme [...] dont on trouvait bien que je reçusse les hommages (La Vie de M., p. 261)

ただし、この例では《on trouvait bien que》が《dont》と《je reçusse...》の間に挿入されている。

28) F. Brunot, *op. cit.*, p. 1652.

II プレオナスムについて

前置詞 *à* や *de* の付いた補語を強調する場合、前置詞が文中で繰り返される *c'est à ~ à qui ~*, *c'est de ~ dont ~* の形は、今日では許容されない。しかしながら、18世紀初頭の文法家 Régnier-Desmarais は《*en François on peut également bien dire, C'est à vous à qui je parle, & c'est à vous que je parle*》²⁹⁾ と述べており、プレオナスムの形も今日用いられる強調構文の形も、両方とも認めていた。ところが、18世紀後半になると文法家たちはプレオナスムの形を批判するようになる。Brunot は、次のように説明している。

la grande majorité des grammairiens de la seconde moitié du siècle critiquent le pléonisme³⁰⁾

ところで、Mauvillon³¹⁾ と Lévizac³²⁾ は、Despréaux の風刺詩の中の一節《*C'est à vous, mon esprit, à qui je veux parler*》を取り上げている。1751年に Mauvillon が《*que se met très élégamment pour de qui, à qui*》と非常に消極的に批判しているのに対し、18世紀末の Lévizac は《*à qui est mis pour que, le seul que l'usage autorise*》と述べ、プレオナスムをきっぱりと否定し、慣用はもはやこの形を認めないのだと主張している。

このように18世紀後半にプレオナスムの形が容認されなくなると、文中のどちらの前置詞を残すかという新たな問題が起こってくる。18世紀の文法家たちは、補語名詞の方に前置詞を残す *c'est à ~ que ~*, *c'est de ~ que ~* の構文を *usuel* であり *élégant* であるとして支持した³³⁾。ただし、関係代名詞の方に前置詞を残す形も、今日、古語法としてではあるが使用

29) F. Régnier-Desmarais, *op. cit.*, p. 741.

30) F. Brunot, *op. cit.*, p. 1654.

31) E. de Mauvillon, *Traité général du stile*, Amsterdam, P. Mortir, 1751, p. 113.

32) Abbé de Lévizac, *op. cit.*, p. 329.

33) F. Brunot, *op. cit.*, pp. 1654-1655.

されることがある³⁴⁾。

マリヴォーの作品の中にこのプレオナスムの形がどのくらい残っていたかを調べたのが、次の表である。右の欄は、それらの形が18世紀後半の全集版の中でどのように変化したかを追跡調査したものである。

〈表4〉

初版 (Garnier)	全集版
c'est à ~ à qui ~ 11/14	そのまま 1/3 c'est à ~ que ~ 7/4 c'est ~ à qui ~ 3/6
c'est de ~ dont ~ 7/12	そのまま 1/3 c'est de ~ que ~ 4/7 c'est ~ dont ~ 2/2
c'est de ~ de qui ~ 0/1	そのまま 0/0 c'est de ~ que ~ 0/1 c'est ~ de qui ~ 0/0

まず、c'est à ~ à qui ~ の構文は、*Le Paysan parvenu* の中で11例、*La Vie de Marianne* の中で14例³⁵⁾ 存在したが、18世紀後半の全集版では、そのままの形で残されたもの（1例と3例）、今日の通常形に直されたもの（7例と4例）、今日では古語法に当たる形に直されたもの（3例と6例）の3通りがあった。それぞれの実例を次に挙げる。

◦ c'était à ses femmes à qui elle parlait

(*Le Paysan parvenu*, p. 12)

→ そのまま

(VIII, p. 14)

34) 朝倉季雄, 前掲書, 185頁。

35) このうちの1例は、第2部のAvertissementの中に見られる。1781年の全集版では、このAvertissementが削除されているので比較は不可能であった。

◦ c'est à vous à qui l'on parle (Le Paysan parvenu, p. 8)

→ c'est à vous que l'on parle (VIII, p. 8)

◦ c'était à Agathe à qui elle parlait

(Le Paysan parvenu, p. 117)

→ c'était Agathe à qui elle parlait (VIII, p. 182)

また、次のように

◦ C'était à lui à qui appartenait le carrosse

(La Vie de M., p. 65)

→ C'étoit lui à qui appartenait le carrosse (VI, p. 342)

◦ ce ne fut point à moi à qui il parla (La Vie de M., p. 65)

→ Ce ne fut point à moi qu'il parla (VI, p. 342)

全集版の同じページの中で、一方が古語法とされる構文（関係代名詞の前に前置詞を残す）に訂正され、もう一方の用例が今日の構文（補語名詞の前に前置詞を残す）に訂正されるということもあった。このように、18世紀後半になってもプレオナスムの問題が完全に解決されたわけではない。

前置詞が *de* の場合についても同様である。c'est *de* ~ dont ~ のプレオナスムの形は、全集版の中では、一部が今日の形に直され、一部が古い形に直され、残りがそのままの形に置かれている。とはいえ、*de* の場合は、今日の c'est *de* ~ que ~ の形に修正されているものが割合の上では多数派を占める。

ただし、どちらの前置詞を文中で残すかという問題に対して全く恣意的であったわけではない。18世紀前半の初版本の中にも、今日の通常の強調構文（c'est *à* ~ que ~ は、*Le Paysan parvenu* で3例、*La Vie de Marianne* で6例あり、c'est *de* ~ que ~ は、*Le Paysan parvenu* で7例、*La Vie de Marianne* で3例ある。）や、古語法といわれる構文が存在するが、次の例のように、

◦ ce n'est pas cela dont je badine (Le Paysan parvenu, p. 58)

→ ce n'est pas de cela que je badine (VIII, p. 342)

古語法に当たる形が今日の構文に改められることはあっても、その逆はな

かったのである³⁶⁾。

また、強調される補語名詞が事物名詞であっても、*c'est à ~ auquel ~*の形はなかった。

◦ *c'est à votre fortune à qui il faut que vous la [=attention] donniez* (*La Vie de M.*, p. 31)

→ *c'est à votre fortune qu'il faut que ~* (VI, p. 293)

◦ *c'est bien à l'amour à qui il appartient de vous offrir un cœur !*
(*La Vie de M.*, p. 422)

→ そのまま (VII, p. 343)

前置詞が *de* の場合には、*c'est de ~ dont ~* の形と並行して *c'est de ~ de qui ~* の形も 1 例見られた。

◦ *C'est de la sœur de ce curé de qui je tiens tout ce que je viens de vous raconter* (*La Vie de M.*, p. 12)

→ *C'est de la sœur de ce Curé que je tiens ~* (VI, p. 263)

これは第 1 章で述べた出所・起源を表す *de qui* である。なお、全集版では *de qui* が *que* に訂正されていた。

III まとめ

前置詞を伴う関係代名詞の用法は、18世紀には文法家たちによって今日と同じように定められており、マリヴォーの作品の中でもこの用法が守られていたことが確認された。すなわち、人に対しては前置詞+*qui*、物に対しては前置詞+*lequel*, *laquelle*, *lesquels*, *lesquelles*, *ce* や *chose* など

36) ただし、古語法として今日でもまだ用いることのできる形が、今日では許容されないプレオナスムの形に訂正されるという、時代を逆行するような例が確認された。

c'était ce contrat dont elle parlait (*La Vie de M.*, p. 286)

→ *c'étoit de ce contrat dont elle parlait* (VII, p. 114)

ただし、確認されたのはこの 1 例のみであったので、Garnier 版（初版を土台にしている。）の誤植という可能性も否定できない。

の漠然とした意味を持つ語や先行する節の文意を漠然と受ける場合には前置詞+quoi を用い、前置詞が de の場合には、人物名詞についても事物名詞についても dont を用いるのが原則であった。例外として、事物名詞を受ける前置詞+qui の実例がいくつか見られた。

間接補語の強調構文における前置詞の繰返し、すなわちプレオナスムの問題は、18世紀後半に文法家たちから非難を受けるようになった。マリヴォーの全集版においても、このプレオナスムの形に修正が加えられている。しかし、文の中のどちらの前置詞を残すかという問題は未解決であって、その結果、プレオナスムのまま残されたもの、今日の形に直されたもの、関係代名詞の前に前置詞を残したものの3通りの構文が混在することになった。

(本学非常勤講師)